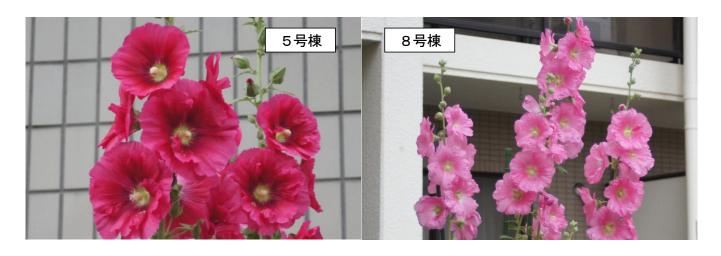


梅雨入りの頃になると、一気に周囲を明るく照らす役割を果たすのがタチアオイです。まさに夏の到来を告げる花です。団地内では、5号棟と8号棟の前に植栽されています。濃淡の差はありますが、いずれもピンクの色合いがとても美しく、10cmを優に超えるほどの大輪を穂状に咲かせる姿は、圧倒的な存在感を放っています。8号棟の花は、花弁がはっきり5枚見える一重咲きですが、5号棟の方は二重咲きになっていて、同時期に咲くシャクヤクにも似ています。



この花はとても不思議なことに、ちょうど梅雨入りの頃に計ったように咲き始め、梅雨明けと共に花期が終わります。そのことから「ツユアオイ(梅雨葵)」という別名も冠されています。逆に言えば、てっぺんの花が咲くと梅雨明け間近という目安にすることもできそうです。

俳句の季語にもなっている「葵」とは、一般的にアオイ科の植物を指し、タチアオイ・ゼニアオイ・モミジアオイなどの総称です。しかし、その直立した姿の凛々しさや花の気品から、今では「葵」と言えば、このタチアオイのことだと聞いたことがあります。

「アオイ」の名前は、葉がどんどん太陽の方に向かう様から「あふひ」(仰日・日向)に始まるようです。 しかし、植物は概ねそういう性質を持っていますから、取り立ててこの植物だけをという気がしなくもあり ません。ただ、その語感と陽性の意味合いから、「葵」さんと名付けられた子が増えている印象があります。

しかし、一昔前までは、「葵」と聞けば、誰でも徳川家の家紋を思い出しました。ところが、タチアオイの葉は整ったハート形をしていません。これは、フタバアオイという山野草がモデルになっています。徳川家の家紋の原型を辿ると、「葵祭」で有名な、京都賀茂神社の神紋に行き着きます。家康の先祖と賀茂神社との縁に始まるのだそうですが、どうして「三葉葵」へと変化したのかは不明です。おそらく近江商人の「三方良し」に代表されるように、双葉の対立構造よりも三葉の方が安定感もあり縁起も良いとの判断なのでしょう。



それにしても不思議なのは、どうしてこんな地味な野草を大事な家紋に選んだのかということです。例えば、ルイ王家はユリであり、イギリス王家はバラであるように、誰でも高貴で華麗な植物をモチーフにするものです。ところが、戦国武将はカタバミとオモダカが人気でした。カタバミは今では郵便局のマークにもなっているのでともかく、オモダカとは田んぼに茂る雑草です。確かに葉の形は矢じりに似ていて戦いの象徴と言えなくもありませんが、敬慕・尊崇とは対極です。



私も人間でありながら、その人間が私を人間嫌いにする。 …… ジュール・ルナール

ルナールと言えば、「にんじん」と「博物誌」が真っ先に思い浮かびます。後者は洗練された一行詩がどこまでも美しく、文句のつけようがないほど気品に満ちています。気になるのは前者の方でしょう。私は小学生時代に読んで、途中で気持ちが悪くなって読むのを投げ出したのを覚えています。とても簡潔な文章で読みやすいのですが、登場人物たちのことを全く理解できなかったのでしょう。それ以来、読み返していないのでエンディングがどうなのか知りません。ただ、最近は、DVやネグレクトを始め、家庭内の虐待が大きく問題視されてきているので、改めて読み直してみる価値はあるのかもしれません。



但し、冒頭句に引用したのは「にんじん」ではありません。「エロアの控え帳」の中の「榛(はしばみ)のうつろの実」の章に出てくる言葉です。「エロアの控え帳」は一般的には有名ではありませんが、とても不思議な作品で、明確な筋立ても統一性もありません。しかし、この言葉に代表されるような皮肉な人間描写は一貫しています。

この言葉は、人間に深く関わろうとするからこそ人間嫌いになるというジレンマを言い表したものです。 少し分かりづらいかもしれないので、解説をしたいと思います。

仕事や教育の場において、誰かに対して期待することでその人のスキルを伸ばす「ピグマリオン効果」は、 完全に市民権を得た言葉になっていると言っても良いでしょう。しかし、期待というものはいつも自分の思っている通りにはならないもので、期待が外れてがっかりしたり、期待外れになったことで「裏切られた!」 とショックを受けたりすることも多々あるものです。

こういったトラブルを何度も重ねていく内に、他人に期待をかけるなんてアホらしい。どうせ期待なんかかけてもその通りにはならない。期待が原因でお互い傷付くぐらいなら、最初から期待しない方がマシだ。などと考えて、他人に対して期待しない習慣を身に付けるということは誰でも1度や2度は経験があるのではないでしょうか。中にはそれが高じて人間嫌いになってしまうという人もいるでしょう。

以上が、私なりの冒頭句の解釈です。

これに対応するためには、他人に全く期待しなければ良い訳で、当然期待が外れてがっかりする事もなくなるのでストレスは減ることになります。その反面、他人に期待していないという態度のせいで周囲と距離感ができてしまったり、相手から心を開いてもらえなくなったりすることも当然考えられます。どちら寄りに生きるかは本人の選択であり、さじ加減一つであるということになります。

恐縮ながら、私の場合はどちらか一方に偏るということはありません。が、基本的な生き方としては可能な限り他人に寄りかからないようにと心掛けてはいます。したがって、自分に必要なことは自分一人で完結させようとするタイプです。例えば、仕事上のことで言えば、誰かが上手なスキルを教授してくれるだろうとか、待っていれば誰かが仕事を具体化してくれるだろうとか、そういう期待を抱いてのんびり待ちの姿勢でいるということは好みません。むしろ自分から次々に仕事を創り出してしまいます。このことは、他人に期待しないが故に、こういった自主性が育ったと言えるのかもしれません。それは大きな利点と言えるでしょうが、その一方で、休まることもないという短所も抱えることとなります。



## ちょっとそこまで

## ~お散歩日和(地域編)~



どこかに美しい村はないか 一日の仕事の終りには一杯の黒麦酒(くろビール) 鍬(くわ)を立てかけ 籠(かご)を置き 男も女も大きなジョッキをかたむける

どこかに美しい街はないか 食べられる実をつけた街路樹が どこまでも続き すみれいろした夕暮は 若者のやさしいさざめきで満ち満ちる

> どこかに美しい人と人との力はないか同じ時代をともに生きる したしさとおかしさとそうして怒りが鋭い力となって たちあらわれる

> > (茨木のり子「六月」より)



豊かで美しい情景を思い浮かべつつ、同時代をともにする人と人との絆の大切さを強く心に訴えてきます。 未来への力を感じる素敵な詩です。しかし、それがなぜ「六月」なのかは、今一つよく分かりません。

近隣を散歩していたときのことです。高松地区の「農の風景公園」で意外な植物に出会いました。大麦畑です。二毛作が盛んに行われていた時代には珍しくもなかった植物ですが、今では「麦秋」という季語も死語に近いのではないでしょうか。聞けば、練馬の地は国産初のビール麦種「金子ゴールデン」発祥の地なので、JA東京あおばが、ご当地ビール復活を推進し積極的に大麦栽培を進めているのだそうです。穂が黄金色に色付き始めていますから、収穫時はもう間もなくでしょう。

そして、「食べられる実をつけた街路樹」と言えば、真っ先に思い浮かぶのが銀杏です。さすがに「六月」との関連は希薄ですが、それでも、この詩にあるような「美しい村」とは、わが「いちょう通り団地」のことだろうと一人合点している次第です。

そう言えば、光が丘清掃工場横の銀杏並木を散策していましたら、 銀杏の木々の根元に、たくさんの実生の苗が繁茂していました。拾い 忘れた銀杏から芽吹いたのですが、こうして必死に命の炎を燃やして いる姿を見ると応援したくなります。

この銀杏ですが、意外にも絶滅危惧種なのだそうです。恐竜の時代に大繁殖したけれど、その後の気候変動などでほぼ絶滅。今はもはや 自生することはなく、挿し木など、人の手で守られて細々と生き続け

ているに過ぎないのだとか。そう思うと、愛おしさもさらに募るでしょうか。



蛇足ながら、本当かどうか知りませんが、銀杏の形状によって雌雄の判別が付く という話を聞いたことがあります。写真の右が雄で、左が雌です。面の数の違いで 見分けるのだそうですが、余り左の形状の銀杏を見たことがありません。毎年、今

年こそは注目してみようと思うのですが、その頃になると面倒臭さに心が負けてしまいます。

さて、太陽が眩しい季節になってきました。以前、酒の肴に「もしも人間の皮膚が緑色をし、光合成ができるようになったらどうなるか。」という居酒屋談義をしたことがあります。当初は「え~~っ!」と悲鳴があがりますが、次のような説明を始めると、徐々に変化が表れてきます。

光合成によって自らの基本エネルギーを生成できるのですから、食事をしなくても良いことになります。 ただ1日に1回くらいは窒素、リン酸、カリウムなどを含む液体肥料のようなものを飲む必要はあるでしょ う。しかし、食事を作ったり食べたりする時間や費用が浮き、そのため、生活に余裕ができるはずです。

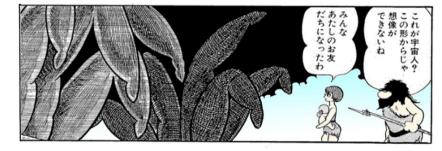
また、今のように他の生物(野菜や家畜など)を殺して食べることをしなくなりますから、食料問題が原因となる戦争や他人との争いがなくなり、人間は精神的にも安定を保ち、性格が今より温和なものになるでしょう。さらに、土地が余り、値段も下がりますから、一生かかってマイホームを手に入れるような苦労もなくなります。その他、風呂に入る習慣は残るでしょうが、トイレは不用になるかもしれません……。

ここまでくると、話の輪に加わっていた人たちの反応も俄然変わってきます。しかし、そんなに良いこと 尽くめではない一面にも触れておくべきです。

例えば、まず皮膚を光に当てて光合成をしなければ生活することができないのですから、服を着なくなります。着るとしても透明が好まれるので、ファッションはがらりと変ってくるに違いありません。学校や会社では、今よりもはるかに明るい照明を使うようになり、その中で裸に近い格好で行動するか、または1日に何時間か強い太陽灯を体に照射するための、特別な部屋が用意されることになります。個人の家も、屋根

や壁が透明に近くなるはずですから、 プライバシーを守るのに苦労をするで しょう。

それよりももっと問題なことがあります。生きていくには太陽の光に当たっていれば良いということになれば、 当然ながら人類は長い間には次第に植



物のように、体を動かさない方向に進化?していくはずです。

おや? この設定は、手塚治虫の「火の鳥」(宇宙編)で読んだような気がします。

(終)